

稱為 “COCOROOM” 的實驗

我們生存的這個世界毫無疑問的是由各式各樣的東西構成的。這些多種多樣的東西相互擁有關聯並建成這個世界。在察覺到與他人的關聯，想要呼應的時候，我們想要試著以某種形式來表現。在那個瞬間，藝術就悠然形成。

我們每日試著通過表現去孕育自立、自律，嘗試以表現為媒介，合理利用與他人聯繫的回路或連接點，成為解決社會和地域問題的契機的活動。但是，從藝術的本質來講，一種推進行動來未步伐的行為，並不是一定是以解決為直接目的的。我們認為在那裡展開的關係性的豐富和活力，以及作為疑問而反復進行的日常行為更為重要。藝術也可說是“生存之術”。

2003年作為大阪市浪速區的都市型遊樂場：新世界 Festival Gate 的市民交流窗口的 COCOROOM 運營了五年之後，2007年末，把據點移到了大阪市西成區統稱為釜崎的地方。在於大阪市協力的五年間，對於公共性和表現進行了摸索和累計。之所以轉移到釜崎，是因為日本最大的勞動力市場沒有藝術 NPO。2008年1月在動物園前商店街開設“INFOSHOP CAFFE COCOROOM”，2009年六月建立了“KAMAN MEDIA CENTER”。建立了一個不以消費為目的，一邊與周邊建立關係，一邊創造表現的機會。然而，隨著急速進行的地域高齡化（注1），面對獨居、護理、孤獨死、葬送等新的領域，從2011年後兩年，介入了地域內擁有四十五室的公寓管理業務。對高齡者臨終場所的照看這件事，理所當然的也是與死亡的對面。

COCOROOM 希望能夠在珍惜與面對困難和孤獨的狀況的人們相會的緣分的時候，自身能夠創造出“表現”的機會。是因為我們相信自我建立一種對存在的表現，會和多種多樣的“生”相關聯，能夠連接到一種新的自治。這也許能夠稱為是為了建造超越立場和領域的對話空間的“運動”。

我們與各種各樣的人——露宿者，生活保護對象，殘障，臨時工，尼特族，懷有某種問題的人，和我們一樣努力過好當下共同呼吸的人相互關聯，一起尋找生存的方法。這並不光鮮亮麗。時不時喧鬧，消沉，困惱，但又十分享受。不起眼的一點一點的，相信時間會帶來變化。可說是社會急速變化的過渡期的現在，我們正在以加深“藝術與社會”為主題的途中，COCOROOM 也正是在那個實驗的最當下。

注1：日本現在正面臨任何一國都沒有體驗過的超高齡社會。2010年代表65歲以上的人的比率高齡化率超過23%，成為了世界第一的高齡社會。在其之中，釜崎高齡化特別進展迅速，釜崎位置所在的大阪市西成區的高齡化率超過34%。

逆棲

與都市邊緣部的對話和再建

據說在亞洲
狗走在路上，也會碰到一些東西（※）
碰到什麼？
扔過來的小石子
夢
新的相會
越洋過海
超越國境
雖然也會跌倒
但是向著新的明天
要多對話
說不出的話眉目傳情手舞足蹈
妙書丹青
高歌一曲
或是沉默為間歇
心變得暖的
變成全新的你
變成全新的自己
在街道上
相會
試著打聲招呼

※ 原文是日本諺語“狗走在路上也會挨棒子”是指愛出風頭的人會被打壓，亦有機會從天而降的意思

逆棲

都市邊緣部における對話と再建

アジアなんだって
犬も歩けば、当たるんだって
何に？
石ころに
夢に
あたらしいであいに
海をこえて
国境をこえて
転んだりもするけど
あたらしいあしたに
おしゃべりするの
話せなかつたら 身ぶり手ぶり目ぶり
絵をかいて
うたをうたって
あるいは 沈黙をあいだに
こころ あたたかに
あたらしいあなたに
あたらしいじぶん
まちななかで
であいあう
こんにちわって言うてみる

ココロームという実験

私たちが生きるこの世界は美にいろいろなものから成り立っている。いろいろなお互いにつながりをもたないこの世界をつくりあげている。他者とのつながりに気づき、呼びよせようとしたときに、私たちは何かしらの「表現」を試みようとする。その瞬間にアートは立ちあがってくる。

「表現」をおとした自立・自律を育むための活動、「表現」を介して他者とのつながりの回路や接続点を通じて、社会や地域の問題解決のきっかけとなる活動を日々試行している。けれど、アートの本質として、未来へ漕ぎだす運動としてのアクションは、必ずしも解決そのものを目的としているわけではない。そこで繰り広げられる関係性の豊かさやダイナミズム、そして問いとして繰りかえされる日常の営みを大切にしたいと私たちは考えている。アートとは「生きる術」でもある。

二〇〇三年に大阪市浪速区にある都市型遊園地・新世界フェスティバルゲートにおいて市民交流窓口となるココロームを五年間運営した後、二〇〇七年末、大阪市西成区にある通称・釜崎に拠点を移した。大阪市と協働した五年間は、公共性と表現について模索を重ねた。釜崎に移転したのは、日本最大の寄世場にアートがなかったからだ。二〇〇八年一月に動物園前商店街に「インフォショップ・カフェココローム」を開設し、二〇〇九年六月に「カマンメディアセンター」を立ち上げた。消費のためでない場を開き、関係をつくりながら、表現の機会を創っていった。そして、地域の急速な高齡化に伴い（注）、孤住、介護、孤独死、葬送といった新たな領域に對して、二〇一一年から二年間、地域にある四十五室のマンションの管理業務を手がけた。高齡者の終の住処のお世話は、やはり死との出会いでもあった。

ココロームは、困難や孤独な状況にある人びとと出会った縁を大切にしながら、自らが「表現」する機会をつくることを望んでいる。存在の現れを自ら立ちあげることが、多様な生をつなぎあい、新しい自治へ結ばれてゆくこと信じている。立場や分野を超えて對話する場をつくらうとするひとつの「うん」と「と」呼べるかもしれない。

わたしたちは、さまざまな人たちとホームレス、生活保護受給者、障がい者、派遣切りの若者、ニート、何らかの問題を抱える人、今日という日を生きているわたしたちと同じように息する人と関わりながら、ともに生きる方法をさぐっている。格好よくはいかない。喧嘩をしたり、落ち込んだり、悩みながら、でもおもしろがりながら、地味にコツコツ、時間を信じている。社会が急激に変化する過渡期ともいえる現在、私たちは「アートと社会」というテーマを深めている途上であり、ココロームはいまその実験のさなかにある。

注1：日本は現在、他のどの国も経験のない超高齡社会を迎えています。二〇一〇年に六十五歳以上の人口割合を示す高齡化率が二二・二%を超えて、世界一の高齡社会となりました。釜崎は、その中でも特に高齡化が進み、釜崎のある大阪市西成区の高齡化率は34%を超えています。

“作為心的種子” 記憶與場所的力量，鏈接社會的藝術工程

人的誕生是一個奇跡。為什麼會在這裡，在這個時代誕生誰都不知道。自然，人生今後會變成如何，這件事也是。誕生之後，我們會與人相見。沒有相見的話人生一點都不會前進吧。相見會讓人後來察覺，察覺到自己接受了“心的種子”。

我們都擁有心的種子。雖然不知從種子裡會發什麼樣的芽，會開出什麼顏色什麼香味的花，但是人人誕生時就擁有它。生命的種子。它連接著生命。從誰的人生連出，又從誰的人生連入。像川流不息，超越時間，給予你向不確定的未來揚帆的勇氣。

但是，忙裡忙外的現代人容易忘記種子的事情。當他察覺到心的種子的存在時，就會尊重生命，同時將目光朝向他人。種子會在捫心自問和與他人的相處中成長。人一個人是活不來的。

“作為心的種子”這個手法是，聽取他人的人生，從中創作言語作品（詩）。創作完成后朗讀，亦是製作詩集，贈送給對方。實際創作時以兩人一組為單位，決定好主題相互取材并當場寫詩朗讀。絕大多數人平日裡不會寫詩，但是用這個手法，人人都能夠寫得一手好詩。各種各樣的聲音實在是太飽耳福。聽取他人的話語，然後僅僅是像這樣直接接受，不知為何心會被打動。過程中不存在評

價與分析，只存在作為同樣充滿困擾和喜悅的人生的主人們安靜的呼吸聲和語言。詩存在於人與人之間。

我開發出這個手法的時期與 COCOROOM 活動開始的時期大體一致。COCOROOM 的活動和“心的種子”的關係十分接近。COCOROOM 的近十餘年的活動，實際上並不是想要去做什麼的態度，而是以只是與他人相見了，聽到了這樣的態度，去持續下來的。因為聽到了社會里存在的無法用語言形容的焦躁不安，於是把大家一起來思考的態度作為了事業。所以經常會被誤認為有介入就職支援，貧困者支援，和城鎮建設的 NPO 混淆等等。但是我們無法成為那樣的專門人士，也不想成為。我們只是“素人里的專家”。只是誕生在同一個時代，偶然相遇的他人而已，但是是作為探索表現手法的人們，時不時改變觀察角度，一點一點的為了自治而進行練習。

然後，我們在全國各式各樣的場所和人們實行了“心的種子”活動。小孩，學生，工作的大人，年長者，刑務所和離島，在 COCOROOM 也是。在釜崎生活的大伯們或是路人。以往以來沒有說出口的心聲，在人與人的詩情中升騰。

出会う、学び、生きてゆく

釜ヶ崎は日本のどの地域にも先駆けて、超高齢化社会へ突入している。日雇い労働者のまちの活気もいまは昔、身体が衰えた住人たちの行動範囲は非常に狭い。「コールドが拠点を置く商店街はまちの端にあり、日常的に足を運ぶには遠いのだろう」、年々人通りが少なくなってきた。イベントやワークショップへ一定数の参加者があり、企画ごとで常連もいる。しかしひとつひとつの企画の頻度は多くて月一回。不安定で先の見えづらい生活をする高齢者にとって、「ヶ月先は遠すぎる未来だ」という声も聞いた。ならば、まちの中心部のあちこちで、より日常的な頻度で、そんなまちの要請に応えるべく企画したのが「釜ヶ崎芸術大学」だった。

三ヶ月間で四十二コマの授業を集中的に企画した。分野は「哲学」「天文学」「音楽」はたまた「フアッション」「感情」と幅広い。場所はまちなかの地域の人にとって馴染みのある三つの施設を借りた。高等教育を受ける選択がはじめからない人生を送ってきた人が多いこのまちで、大学という名前をつけることには迷いもあったが、集い、学ぶことの魅力と主体的に学ぶ大学という言葉を信じようと思った。

初めての試みに不安だらけで迎えた開校だったが、初日から二十人以上の参加があった。それから連日の授業に休まず通う人も多く、授業へ向かう姿勢も真剣そのもの。疑問があれば納得がいくまで質問し、講師やほかの参加者に対して面と向かって批判的なことを言う人もいた。私たちが経験してきた学校の授業では、そういう状況に出会うことはあまりなかったように思う。しかし学びとは本来、一方的な話を聞くことではなく、主体的に考えることに本質があるのではなかったか。このまちの人たちは学ぶことから遠ざけられてきたからこそ、画一的でない学び本来の魅力を知っているのかもしれない。

ある参加者は夜の授業でこう話した。「普段はこんな時間まで起きて何かしていることがないです。も

う寝るだけ。遅くまで一生懸命、勉強して考えてられるのが嬉しいね。」

またある人はアンケートに書き残した。「今日も寝たきり老人を免れた。」

授業の時間が充実しているというだけに留まらず、通うことが生活のリズムをつくっているのを感じた。最初はほとんどの人が互いに初対面だったが、通ううちに関係ができていった。授業以外の時間にも一緒に過ごしたり、コールドのカフェに足を運んでくれるようになった人もいる。

釜ヶ崎芸術大学には、ほかの地域から参加する人も少なくなかった。このまちに興味を持つ人、地域に根ざしたアートに関心のある人などさまざまだったが、それぞれにこのまちの人の学びに対するエネルギーに圧倒されたり、なにかしらの感慨を持って帰っているようだった。それは画一的な語り方をきれいすいこのまちに対する眼差しを変化させることへつながっているように思う。

最後に行った成果発表会では参加者同士が思い出を語り合い、次の学期が待ち遠しいという声が多く聞かれた。それは単に勉強することへの欲求でもなく、仲間同士で集まる楽しみを望んでいるだけでもないように感じる。さまざまな人が集い、絶えず変化する関係の中で共に学びあうダイナミックな体験があり、その熱のかけらが生活の基調となって毎日をいきいきしたものにへ変えていく。お互いの人生をていねいにまじわらせた大学生活だったからこそ、続けたいと願ったのだと思う。

現在、週一回のペースで「自主ゼミ」と題した小さな集まりをひらきながら、次の学期を準備中である。始まったばかりの、しかし決して小さくないこの流れを絶やさないため、場をひらき続けてゆきたい。

釜崎藝術大學

—在釜崎町，相會，學習，和生存

釜崎比起日本の任何一個地域都率先突入了超高齡化社會。短期雇傭勞動者之鎮的活力早已成為往昔，身體衰弱的住民們的行動範圍變得十分的狹小。COCOROOM 放至據點的商店街在鎮的邊緣，日常生活上要搬動腳步到這裡應該是有點遠吧，年年過往的行人漸漸變少。特定的活動和工坊有一定數量的參加者，每次企劃都有回頭客。但是，每個企劃進行的頻率多也不過每月一次。也聽過對過著不安定而且難以預想未來的生活的高齡者來說，一個月后都是遙遠的未來這樣的聲音。

如果這樣的話，就在鎮子的中心部的各處進行，以更日常的頻度。爲了鎮上的要求能後被回應，我們企劃了《釜崎藝術大學》。

3個月間我們集中計劃了42節課程。領域有“哲學”“天文學”“音樂”且時不時進行“時尚”“感情”等範圍很廣。場所借用了被鎮上的人所熟悉的3所設施。在擁有較多度過了從一開始就沒有接受高等教育這項選擇的人生的人們的鎮子里，冠以大學這個名稱實際上有很多猶豫，但是我們決心相信聚集，學習的魅力和學習主體的大學這句話。

對於初次的嘗試我們充滿了不安迎接了開校日，從第一天就有20名以上的參加者。之後連日沒有休息來上課的人也很多，面向上課的態度也是十分認真。有疑問就直到理解為止提問，對講師和其他參加者面對面的提出批判的人也有。我們所體驗過的學校的課程里，似乎沒有見到過這樣的狀況。但是學習本來就不是一方面的聽取，其本質難道不在主體性的思考這件事上嗎。這個鎮上的人也許正是因為遠離了學習，所以才知道沒有被統一化的學習的本來的魅力。

有一位參加者在晚上的課上這樣說。
“平日裡沒有什麼事情可以干到這個時候的。就只是睡覺。可以努力學習

こころのたねとして――

記憶と場所の力、社会をつなぐ アートプロジェクト

人が生まれるのは奇跡的なことだ。なぜここに、この時代に生まれたのかは誰にもわからない。そして、その人生がどうなるのか、ということも。生まれてきてから、わたしたちはであう。であいがなければ人生はちっとも前に進まないだろう。であいは後に気づかせてくれる。「こころのたね」を受け取っていたということ。

わたしたちはこころにたねを持っている。たねからどんなかたちの芽が出て、どんな色や香りをもつ花を咲かせるのかはわからないが、生まれたときにそれを持ったのだ。いのちのたね。それはいのちをつなぐ。誰かの人生から連なり、誰かの人生へ連ねるもの。川のように流れ、時間を越えて、不確定な未来へと漕ぎだす勇気をあたえるもの。

けれど、何かと忙しい現代人はたねのことを忘れがちだ。こころのたねの存在に気がついたとき、生きることを導び、同時に他者へまなざしを向けることになるだろう。たねは自己への深い問いと人との関わりのなかで育まれる。人はひとりでは生きられない。

「こころのたねとして」（以下、「こたね」というメソッドは、他者の人生を聴き取り、そこからことばの作品（詩）をつくる。つくったあとは朗読したり、アンソロジーをつくったり、相手の方にプレゼントする。ワークショップのときは二人一組になって、テーマを決めてお互い取材しあいその場で詩をつくり朗読する。多くの人はめったに詩をつくらないが、この手法を用いると誰でもすごい詩をつくる。さまざまな声が耳に心地よい。人の話を聴き、それをそのままにこんな風にうけとりましたよ、というだけのことに、なぜかこころ打たれる。そこには評価や分析はなく、同じように悩んだり喜んだりして人生を生きているものとして静かに息をする声であり、ことばである。詩が人と人の間にある。

わたしがこのメソッドを開発した時期とコールドの活動の開始はほぼ同時である。コールドの活動と「こたね」はとても接近した関係にある。コールドが十年余活動しているのは、実は何かをやりたいからというわけではなく、他者とであってしまった、聴いてしまった態度として、仕事をつづけているように思う。社会のなかにある、まだことばにならないようなモヤモヤしたものを聴いてしまったことから、いっしょに考えてみようとする態度を事業にしてきた。だから、就労支援や困窮者支援を手がけているかのようにみえたり、まちづくりのNPOに間違われたりする。でも、それらの専門家にはなれないし、ならない。わたしたちは「素人のプロ」だ。同じ時代を生き、たまたまであつた他者にすぎないが、「表現」のあり方をさぐる者として、ときには読みかえを行いながら、ささやかに自治のための練習をしている。

そして、「こたね」を全国さまざまな場所で試みしてきた。こども、学生、働く大人たち、高齢者、刑務所や離島で、そしてコールドでも。釜ヶ崎で暮らすおじさんたちや通りすがりの人たちと。これまで声にならなかったおもいも、人と人の間で詩情となつてたちのほろ。

詩犬通信 第35号 鳳甲美術館版本
発行日：2013年9月14日
発行：NPO 法人即語言與心靈の房間 (COCOROOM)

郵便 557-0001 大阪市西成区山王 1-15-11
INFOSHOP CAFE COCOROOM
NPO 法人即語言與心靈の房間 (COCOROOM)
Tel&Fax.06-6636-1612(+81)
info@cocoroom.org/http://www.cocoroom.org

Access
大阪市營地下鐵・御堂筋線、堺筋線 “動物園前驛”
出2號出口，直接進入動物園前一番街。亦或是，從JR “新今宮驛” 東口出來沿 43 號線向東前進入動物園一番街。從商店街入口徒步一分。“INFOSHOP CAFE COCOROOM” 與 “KAMAN! MEDIA CENTER” 是相互面對的。

ほえ犬通信 第35号 鳳甲美術館バージョン
発行日：2013年9月14日
発行：NPO 法人こえとことばとこころの部屋 (コールドム)

〒557-0001 大阪市西成区山王 1-15-11
インフォショップ・カフェ コールドム
NPO 法人こえとことばとこころの部屋 (コールドム)
tel&fax.06-6636-1612 (+81)
info@cocoroom.org / http://www.cocoroom.org

アクセス
大阪市營地下鉄・御堂筋線、堺筋線 “動物園前駅” 2 番口を出て、すぐ動物園前 1 番街に入る。あるいは、JR 「新今宮駅」 東口を出て 43 号線沿いに東へ進み、動物園前 1 番街に入る。商店街入り口から徒歩 1 分。「インフォショップカフェ・コールドム」と「カマン！メディアセンター」は向かいあっています。